日本鳥学会

鳥学ニュース No.40

1991年7月31日

鳥学会へもっと若手研究者を！

藤岡正博

歯に衣を着せぬ意見を、というのが新編集部の注文である。それなら私でもできるかもしれない。歯に金をかぶせたことはあるが、衣を着せたことはない。以下にかなり率直で、どこか外野的な意見を述べることにする。

現在の日本の鳥学（会）は質・量とも一部の先進国に比べて格段に見劣りする。以下の議論はこうした現状を改める、つまりすそ野を広げ、かつ国際的にもトップレベルの研究者を育てるべきだということを前提にしている。

鳥学ニュースNo.26の特集、「最近の鳥学会大会」を見ると、年々発展してきた大会の様子がわかる。これは参加者数などに現れるものだけではあるが、少なくとも古い会員には発展ぶりはけっこう実感できるのだろう。しかし、私のように比較的新しい会員にとっては、大学も学会誌も（人材も）とりたてて発展しているようには感じられない。

私は生態学会や行動学会、それにいくつかの海外の学会にも入っている。比べてみると鳥学会には鳥学会の良さがある。が、やはり物足りないのである。大会についても学会（誌）についても、若い研究者（特にバリバリの大学院生）が少ないし、データが乏しかったり主旨のはっきりしない発表も目立つ。これでは初めて大会に来たり雑誌を見た学生が、学会とはこんなものかと思うのではないだろうか。

鳥学会のすそ野はそれなりに広がってきている。かなり籠の方ではあるが、日本野鳥の会の会員はここ10年で1万人から3万人に増えている。マスコミはしょっちゅう鳥のことを取り上げるし、大学で鳥の研究をやらせてくれという学生も少なくない。しかし、山頂の方の伸びはちょっとスローだ。これは我が学会（学界）にもなにか罪があるのではないだろうか。

鳥学ニュースNo.39によれば毎年入ってくる学生会員はわずか10ないし20人、平均で3割にも満たない。私の知る限りでも鳥の研究に携わっている学生のかなりの部分は鳥学会に入っていない。その理由は、払う学会費に対して返ってくるものが少ないということであろう。本会の会費は1990年度より5000円にもなった。学生にこれだけ払わせるのは酷である。もちろん会の財政事情も考慮しなければならないが、3000円程度の学生会費新設はできる範囲のことだろう。ちなみにAukの会費は一般約4800円に対して学生約2500円、Ibisは一般約4400円、学生約2500円である。

フロリダヤブカケスを観察中の筆者

学生会費制で払う額は少なくするとして，返ってくるものをどう大きくするか。今の鳥学ニュースは大変よくやっていると思うので，残るは、なんといっても学会誌である。

ニュースNo.36で編集幹事の斎藤氏が会員に「論文を投稿してより多くの〝利益〟を得」るように薦められている。大賛成だ。鳥学会誌は印刷もきれいだし受理から印刷までも比較的早いので、大いに利用したい。しかし、論文というものは他の人に利用されてこそ価値が出るものなので，現在の鳥学会誌は投稿者にあまり利益を感じさせない。はっきり言えば，同じ論文を他へ発表した方が〝利益〟を得やすい。

学会としてすぐできることとして，もう少し親切な投稿規定を毎号学会誌に載せてほしい。次にレフリー制を名実ともに確立する。レフリーは複数とし，編集委員に限らず広く適任者を選ぶべきだ（内規ではそうなっている)。レフリーが原稿を改善するために添削指導することは大いにけっこうだ。ただ、レフリーはやはり判定者なので，学会誌にふさわしくない原稿や，レフリーの指導に対して誠実に応えない投稿者には，地位などに関わらずきびしく対応すべきだろう。

また、善し悪しはともかく今は情報化社会である。ちまたにあふれる学術雑誌から鳥学会誌に載った論文を見つけだしてもらうためには，Current Contents 等のデータベースや目録サービスに載るように努力する必要があるだろう。

掲載論文の質を上げるのはなかなか大変だ。「いい論文を鳥学会誌へ」などといくら呼びかけても、他の国際誌に掲載できそうな原稿を鳥学会誌に投稿しようという人は少ないだろう。個人の自己犠牲的良心に頼っても事は良くならないものだ。時間はかかるが，論文発表の経験豊かな人が「平均値」よりも少しでも優れた論文を投稿していくしかないだろう。国内（外）の他の鳥学関係の雑誌とどう棲み分けるかもいつかは検討されるべきだと思う。

物事を一面的に見る事はいつも慎まなければならない。鳥学会には鳥という分類群を扱う学会として他の学会とは違う立場や役割がある。アマチュアが重要な役割を果たしてきたのも事実であるし、私もアマチュアとは助け助けられの関係を持ってきた。それでも日本の鳥学に今もっとも必要なのは、他の分類群の研究仲間に、そして世界に通用する若手の研究者だと思うので，鳥学会として何をすべきか少々きびしく考えてみた。反論は大歓迎である。

関連学術集会（1991年）

8月22～29日　第22回国際動物行動学会議（京都・大谷大学）
8月30～9月1日　国際動物行動学会議サテライトシンポ「托卵鳥と仮親の共進化」(長野)*
11月27～30日　国際シンポジウム「環境と内分泌からみた鳥学」(インド・スリナガル：前号に記事)　　＊問い合わせ：中村浩志（信州大）

地域的なものも含め，関連する学会・シンポジウムなどの予定を、ニュース発行に間に合う範囲で載せていきます。地域的なものは編集部でフォローできないものもありますので，他学会の地区会等も含め，どんどんお知らせ下さい。

第14回極域生物シンポジウムが開かれます！

1991年12月4日～5日に，国立極地研究所講堂（6F）にて上記のシンポジウムが開催されます。12月4日（水）が海洋生物セッションで「極域における海鳥と海獣の採食生態」，12月5日（木）が陸上生物セッションで「キングジョージ島における生態系」です。両日とも午前がシンポジウム，午後からポスター発表とワークショップがあります。極地研ではこのシンポへの参加及び発表を受け付けています。問い合わせ・申し込みは8月31日までに国立極地研（〒173板橋区加賀1-9-10 〈03-3962-4711〉）へ。コンビーナーは内藤靖彦（内線353)・大山佳邦（内線352）の両氏です。

飛　び　立　つ(4)

大野よいとこ一度はおいで

大迫義人

この6月1日より、越前大野市の山腹にあります福井県自然保護センターで、林哲さん（鳥学会会員）の後任として勤めることになりました。大野市は、福井市から南東へ約30㎞入った、石川県、岐阜県との県境に近い盆地にあります。周りを山に囲まれて、私が長いこと住んでいた京都を彷彿させる風景が並んでいます。

大野市は、水と空気、そして景色のきれいな所です。人々ものんびりしています。冬は雪が深いのだそうですが、今の季節は緑が目にまぶしいです。田舎の大好きな私にとって、山間で暮らせることに今、無上の喜びを感じています。

去年の7月に開所した当センターは、県の鳥獣保護機関であると同時に博物館でもあります。仕事としては、鳥獣の保護に関する行政、及び自然保護の普及啓蒙と調査研究です。行政については全くの初心者であり、とまどいもありますが、事務的な仕事ですので、要領良くこなして自分の研究時間を作ろうと思っています。

大野盆地は、セキレイが多く生息しております。去年はセンターの建物でキセキレイが営巣していたそうですし、6月中旬には市街地で夏羽のハクセキレイを観察しました。繁殖の確認という仕事が早くもできてしまいました。また、センターから車で5分ほど行けば、集落の点在する田畑が広がっています。セグロセキレイの調査をするにはもってこいの場所です。落ち着いたら本格的に研究を再開する予定です。

大阪市立大学時代、鳥学会の皆様には常々ご指導、ご支援していただき有難うございました。お陰様で就職できました。これからも、鳥学の発展のために微力ながら努力していこうと思っております。

勤務先〒912-01福井県大野市南六呂師169-11-2福井県自然保護センター(Tel0779-67-1655)

めぐりめぐって

中村雅彦

信州大学を卒業してから10年目、この4月から上越教育大学（自然系理科コース）に職を得ました。上越教育大学は、私にとって修士課程を卒業した第二の母校であり、3月まで在籍し単位取得退学となりました大阪市立大学は第三の母校となります。というわけで、私には学部、大学院修士、博士課程でそれぞれ異なる都合3大学の母校がありまして、めぐりめぐって上越教育大学に就職となりました。おかげで、毎年各大学の寄付金やら同窓会費に泣かされています。

鳥学ニュースNo.26で中村登流先生が紹介されているように、上越教育大学は新潟県上越市にある教育系の単科大学で、新しい理念と構想のもとに、学校教育に関する理論的・実践的な教育研究を推進するために設立された新構想の国立大学です。4年制の学校教育学部と大学院学校教育科修士課程があり、大学院には学部卒の学生以外に、現職の教員（小・中・高校）が県教育委員会の推薦を受けて入学するのが特徴です（もちろん、入学試験もあります)。創立されてから、10年そこそこしか経っていない大学なので建物は驚くほどきれいです。緑に囲まれたキャンパスは田舎育ちの私にとって落ち着いた環境でもあります。就職に当たり、学生時代のようにヒッピーみたいな生活をすることは慎むようにと中村先生から訓戒があり、大学構内にある官舎から毎朝通っています。

生態学研究室には、院生が9人、学部生が6人います。学生の多さからいったら理科の中では最大勢力です。鳥の野外研究をやっている学生が一番多いのですが、タヌキや両生類を材料にしている学生もいます。上越教育大学は女子学生の占める割合が7割ですが、幸か不幸か生態研にはひとりもいません。現在はデータの書入れ時ということもあり、中村先生をはじめ院生・学部生の皆さんは野外に出ており、私は大学で留守番をしています。

研究室には野外で生物を研究するのに必要な備品も揃っており恵まれた環境です。それにもましてうれしいことは，生態研究に従事する学生がたくさんいることです。自分の専門外の話が聞けたり，学生の若い感性に触れることができるのは研究室ならではです。

私自身は，ここしばらくイワヒバリの研究の総まとめに時間を集中する予定でいます。昨年後半は，大阪市立大学の私の指導教官である山岸哲先生に同行してマダガスカル島の鳥類生態調査に従事したり，ニュージーランドでの国際鳥学会議に参加したりと落ち着かない日々を送っていました。ここ数年は，じっくり腰をすえて，標高3026mの乗鞍岳で岩にしがみつきながらかき集めたイワヒバリのデータを分析し，論文作成に集中したいと考えてます。私を励まし，勇気づけて下さった多くの会員の方々に，紙面を借りて心からお礼を述べさせていただきます。

イワヒバリ（大天井岳）

洋書は直接輸入で安く買おう　―鳥の本屋紹介―

上　田　恵　介

洋書を買うとき，丸善や紀伊國屋などで注文されている方も多いだろう。たしかに手間を考えると楽かも知れないが，つい最近まで1＄＝360円で計算していた悪どい本屋があった。いまでは多少良心的になったとはいえ，それでも値段はゆうに1.5倍はする。なにも本屋を儲けさせることはない。自分でどんどん注文しよう。クレジットカードが使える本屋も多くなったし（サイン一つで送金の手間が省ける），日本で自分の郵便振替口座をもっている人は，口座間の送金もできる。日本語の注文書を送ってくれる本屋もある。古本ならかなり安いし，絶版になっている本を堀出す楽しみもある。そんなわけで私が時々，利用しているお店を紹介します（上田の紹介だといってもまけてはくれないと思うので念のため）。まず「カタログ送れ」とハガキ（世界均一70円）を出すこと。

【イギリス】

◆St. Ann's Books (Rectory House, 26 Priory Road, Great Malvern, Worcestershire, WR14 3DR, England): スコットランドのBird Bookshopを引き継いだ本屋。最近でた鳥の本ならほとんど揃う。自然史関係の古本も扱っている。

◆Wheldon & Wesley (Lytton Lodge, Codicote, Hitchin, Herts., SG4 8TE, England):由緒ある自然史関係の古本屋。リンネやダーウィンの貴重本も扱っている。分厚いカタログといっしょに，日本語の注文書を送ってくれる。

以上2店はVISA･MASTERCARD･ACCESS･EUROCARDを受け付けている。郵便振替による支払いも可。

【アメリカ】

◆Peacock Books (P. O. Box 2024, Littleton, MA 01460, USA): 大学関係の出版物も含め，アメリカ関係の鳥の古本はよく揃っている。カードを受け付けないのが難点。

◆Raymond M. Sutton, Jr. (430 Main Street, Williamsburg, KY 40769, USA): 鳥以外の自然史関係の古い書物も豊富にそろっている。VISA･MASTERCARD･AMEXが使える。

【オーストラリア】

◆Andrew Isles (115 Greville, St., Prahran, Victoria 3181, Australia): 新本を扱っている。オーストラリア独自の鳥の出版物は多いし，送料が安くて，届くのが早い。私はVISAしか使ったことがないが，それ以外のカードも使えると思う。

韓国鳥類学会大会に参加して

浦　野　栄　一　郎

去る２月２～３日に韓国釜山市において第１回韓国鳥類学会学術発表大会が開かれた。私は学会のお招きで訪韓し、多くの鳥類研究者と交歓する機会を得たので報告したい。

韓国鳥類学会は昨年２月に誕生したばかりの新しい学会である。現在の会員数は50名余りで、大学の教官や林試の研究員が大部分を占める。これまでにニュースレター（韓国鳥類学会報）を２号発行しているが、学会誌の発行はこれからである。私の訪韓は、韓日の若手研究者の交流を図るために学位取得直後の者を呼びたいというあちらの希望と、無職に近いため身軽に動けるというこちらの事情（？）がかみ合って実現した。

大会は２日に市内の慶星大学を会場に行なわれた。参加者は40名余りで、学会員数を考えるとたいへんな出席率である。「待ちに待った第１回大会」という熱気を感じた。11時からの総会に続き、元炳旿会長と私が特別講演を行なった。会長講演は、韓国産の320種について絶滅の危険性や現在得られている情報を総合的に評価し、保護対策を優先すべき種を決めようとの試みだった。私はオオヨシキリの一夫多妻制配偶システムについて講演した。講演は日本語でさせてもらい、昨年まで北大に留学していた李宇新さんに通訳をお願いした。出発前に韓国では動物社会学あるいは行動生態学になじみがうすいと聞いていたので、鳥の配偶システムやそれを研究する意義について簡単に説明してから自分の研究の概要を話した。李さんの（おそらく）正確な通訳のおかげで、多くの人に興味を持ってもらえたようである。

午後の一般講演は、発表順に(1)韓国で新記録のカモメ類、(2)セッカの繁殖期の分布状況、(3)メボソムシクイの音声の発音状況による変化（ソナグラフを使用）、(4)山林性鳥類の生息生態と重金属蓄積、(5)有機塩素化合物の残留、(6)ハマシギのタンパクおよび脂肪蓄積の季節変化、(7)水銀の体内蓄積と換羽による排出機構、(8)ナベヅルの越冬生態（特に行動の時間配分）、(9)済州島に導入されたカササギの分散と繁殖の実態、(10)森林性鳥類の採餌ニッチの季節変化、という内容であった。予想以上にテーマは多様だったが、全体的には環境問題や保護・管理の視点からの研究が目立つ。韓国でも環境問題に対する関心は高く、(5)の閔丙充さんの発表は翌日の地元紙に大きく取り上げられていた。

活発な質疑応答のため、ほとんどの講演が制限時間を超過した。皆さんが実に堂々と自分の意見を述べるのには感心させられた。しかもかなり厳しい内容の議論をしているらしい。この辺は日本の学会でも見習いたい。ただし、後で気がついたのだが、会場で議論に参加していたのは教官クラスだけで、学生の発言はなかった。そういえば発表者も１名をのぞいて私より年上だった。これは韓国社会に根強いという儒教文化の影響なのだろうか。当然のことながら、学生に意見がない訳ではないことは個人的に話してみてすぐにわかった。

その晩の懇親会も、翌日の釜山市西郊の洛東江河口へのエクスカーションも楽しかった。河口堰ができてから個体数が激減したとのことだが、ボートでまわった広大な水域ではツクシガモの大群をはじめ多数の水鳥を観察できた。これらの合間に何人かの若手とゆっくりと話ができたのは、それ以上の収穫であった。彼らは鳥の行動をよくみているし、勉強もしている。彼らの研究成果が発表されるのが楽しみである。

今後両国の鳥類研究者が、学会レベルでも個人レベルでも交流を深め、よい意味で刺激し合っていくことが大切だろう。今回の訪韓にあたり、私をあたたかく迎えて下さった元会長をはじめとする韓国鳥類学会の皆さんに感謝してこの報告を終えたい。

日本鳥学会大会は９月14・15日（立教大学）早く申し込みを!!

三宅島での卒業研究

伊豆諸島とトカラ列島中之島でしか繁殖の確認されていないアカコッコはとても魅力的な鳥です。動物地理学的側面やその生態に関して未知な部分が多いことが魅力の1つですが、キョトンとした瞳とひょうきんそうな雰意気はなにかひきつけられます。

昨年5月から伊豆諸島三宅島でアカコッコの調査をしています。私の所属する研究室は林学の造林学研究室であるため、必然的に森林と関連させたテーマでの卒業研究になります。アカコッコがどのような棲息場所をどのように利用しているかを中心に調査をしています。アカコッコに限らず森林に棲息しているツグミ類全般にいえることと思いますが、たとえ捕獲しマーキングをしても樹木の密集した暗い森林内を移動し、広い行動圏を持つこの鳥を個体追跡し行動を記録することはひじょうに困難です。

この調査にはもう1つ大きな目的があります。三宅島では農作物のネズミによる食害を防ぐため、1975年に♂イタチ20頭が三宅村により放獣されました。しかし、その後、雄雌十数頭が未公認のまま放獣され、増加し、島のいたるところで簡単に観察されるようになりました。オカダトカゲ（伊豆諸島特産）の激減もイタチによるものと考えられていますが、近年アカコッコも急激に個体数が減少したといわれます。イタチによるアカコッコの（捕食などの直接的な）被害も目撃されていますが、樹洞営巣性の鳥（シジュウカラ、コゲラ等）も被害を受けているようです。巣箱や樹洞中の巣を破壊して中の卵や雛を捕食したりすることがあるようです。なにしろ多くのデータを集めイタチの除去を考えたいものです。

これらの調査は日本野鳥の会研究センターの樋口広芳氏に御指導をいただき、又協同で研究をさせていただいています。樋口氏の過去のデータと現在のデータ（私のとった）を比較するのが楽しみです。

（東京農大農学部4年）高木昌興

足輪をつけられたアカコッコ（三宅島）

野鳥とマダニ

マダニ刺咬により感染するマダニ病は1986年長野県で初めて発見され、その後各地に患者が発生しています。長野、福島、北海道産マダニ類は約20%の割合で病原体のBorrelia burgdorferi（スピロヘータ）を持っています。一方、マダニは鳥に寄生して分散する可能性があります。事実昨年10月山階鳥類研究所（佐藤文男氏）の標識調査に参加し、アオジやクロジなどの眼周囲からシュルツェマダニの幼虫や若虫を採取できました。日本にこの様な基礎的研究は大変少ないのが現状です。

"全国の標識調査を行っている皆さん！"
ダニ寄生例がありましたら是非そのダニを私共に見せて頂けるようお願いします。ダニは小さなプラスチック容器に70%アルコールと共に入れ郵送して頂けますれば幸いです。

〒078 旭川市西神楽4線5号3-11
旭川医科大学　寄生虫学教室　宮本健司

上越地方のカモメ類

「鳥の研究ができる」。それだけで上越に来て1年が経ちました。現在、中村登流先生の研究室（上越教育大学大学院）で、カモメ類の採食、越冬生態の比較研究をしています。

日本海側で生活するのはこれが初めてなので、この1年、日本海側の天気に振り回されました。体温以上になったフェーン現象もさることながら、やはりすごかったのは冬の日

本海。空も海もどんより鉛色。月に数日しか出漁できず船は港に上げられたまま。港に人影はなくなって、自分とカモメ達以外生き物の見えない何とも奇妙な世界でした。

カモメ類は、その生活の幅広さ、行動範囲の広さや種数、個体数の多さなどのためか、特に越冬期については不思議なほど調べられていません（調べる奴の方が不思議だと言われますが）。実際各種がどこまで何でも屋なのか、いつまで経ってもその多様性、融通性には驚かされています。

調査は沿岸、河川、季節によっては田んぼでの観察、カウントと、海が（比較的）穏やかな日に佐渡航路を使って海上での様子を観ています。

まだ全国的に詳しく調べたわけではありませんが、ほとんどの地方で複数種のカモメ類が越冬しており、地方ごとに少しずつその種構成も異なるようです。全国各地方ごと、ある環境ごとに越冬しているカモメの種の組合せというものはどうなっているのか気になります。例えば各地の島や、あるいは有明海などではどうなっているのでしょうか。

調査地の上越地方では、８種程のカモメ類が越冬しますが、普通にみられるのはユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、カモメ、ウミネコの５種です。沿岸ではウミネコが最も多く、次に多いのがオオセグロカモメで、この２種で全体の７割以上を占めます。しかし、一部の河川ではユリカモメ、カモメ、セグロカモメの３種がこの順に多く、ウミネコ、オオセグロはほとんど来ません。この他にもシロカモメが川を遡行して来たり、予想外のズグロカモメが一羽しばらく滞在したりして慌てさせられました。

そんなこんなで今しばらくは〝カモメ屋〟が続きそうです。

（上越教育大学大学院）高木　武

成末編集委員の若手研究者インタビュー（1）

―永　田　尚　志さん―

私が、永田尚志氏に初めてお会いしたのは確か今年５月に立教大学で開かれたDr.キャロラ・ハース氏の講演会席上であったように思う。永田氏は、一見無口そうなイメージとは裏腹に、質疑応答の折には、英語が静かな機関銃のように突び出す方であった。

永田氏は、1991年３月に九州大学理学部生物学教室の博士課程を修了し、現在研究生として在籍中である。一方、藤岡正博氏（つくば・農研センター）の伝で、身柄はつくばの国立環境研究所にあり、地球環境野生生物チームのスタッフとして、熱帯雨林の脊椎動物に関する調査をする傍、新天地でのフィールドを開拓している。

在学中は、ウグイス亜科の社会構造、特にウチヤマシマセンニュウの一夫一妻の婚姻システムについて、足掛10年、博多湾入口のいくつかの島で調査していた。特に後半の５年間は、毎週３～４日は島でのテント生活で、「なぜ、ウチヤマシマセンニュウを？」という野暮な質問にも、氏は、屈託のない表情で「本当はね、一夫多妻のオオヨシキリをやりたかったんだけど」と、大学時代に埋立てられてしまったフィールドの事を話して下さった。紙面の都合で、屋久島などでの調査研究が紹介出来ないのが残念である。

永田尚志さん（INTECOLにて）

編集委員紹介：今号から上田・中村の２人の幹事以外に、編集委員として成末雅恵さん、大堀聡さん、花輪伸一さんの３人にも加わって頂いて、いろいろなアイデアを出してもらい、会員の皆様により役立ち、親しまれる誌面作りをしていきたいと思います。成末さんには今回から新しく始まった「若手インタビュー」を、花輪さんには「NEWS FILE」を担当して頂いています。会員の皆さんも、原稿やアイデアをどんどん送って下さい。

お早く！

—大会申し込み，〆切りは7月31日—

日本鳥学会1991年度大会は東京・池袋の立教大学で開催されます。多くの会員の方々の積極的な参加，発表を期待します。

シンポジウムテーマは「種子散布者としての鳥類-鳥と木の実の共進化-」で，鳥と植物の共進化の問題を取り上げます。演者は福井晶子（つくば大・生物・動物生態），小南陽亮（森林総研・九州支所），岡本素治（大阪市立自然史博物館），下田勝久（大阪市大・理・生物），上田恵介（立教大学・一般教育・生物）。進行役は唐沢孝一（都立城東高校）。小南・岡本・下田氏は日本鳥学会の会員ではありませんが，植物学の立場から鳥に運ばれる木の実について，精力的に研究を続けておられる若手研究者です。また「鳥害研究会」をはじめ，いくつかの自由集会を15日のシンポ終了後に予定しています。会場の手配はしますので，遠慮なく申し込んで下さい。

今年の大会はこころみにスライドの枚数制限を無しにします（ただし制限時間15分はきっちり守ってもらいます）。ポスター，ビデオも重視しますので，もっておられるデータを気軽にご発表下さい。1人の発表題数も制限なしです。活発な議論が飛び交う大会にしたいと思っています。

開催日程：1991年9月14～15日

	朝（9:00～）	昼	午後	夜
14	講演		講演	懇親会
15	講演	総会	シンポ	自由集会

会場：立教大学5号館（1·2F）

費用：参加費：1000円（当日1500円）

懇親会費：3000円（当日3500円）

申し込み方法：振替用紙（郵便局でもらって下さい）の裏面に(1)発表の有無（なし，口頭，ポスター，ビデオの別を記入），(2)発表者氏名（連名の場合は全員），(3)発表タイトルを記入して，懇親会に出る方は4000円，参加のみの方は1000円を**東京8－19607**まで振り込んで下さい。申し込み〆切は7月31日（2－3日の遅れは認めますが，責任は持てません）。講演を申し込まれた方には，講演要旨の記入用紙を送ります（講演要旨の〆切は8月末）。また8月中旬に参加申し込み者全員に大会プログラムを発送します。

連絡・申し込み先：

〒171 豊島区西池袋3丁目　立教大学
一般教育部生物研究室，上田恵介気付，
日本鳥学会1991年度大会準備委員会
Tel.03-3985-2596　(Fax.03-3986-8784)

編集後記

◎「学会誌がなかなか出えへんので，ニュースだけでもがんばらなあかんなあ」というのが，梅雨の晴れ間にヨシゴイを見ながら，編集をやっている私の正直な感想です（松岡さんガンバッテ）。今号からニュースの編集を川内さんから引き継ぎ，中村一恵さんと2人でやっていくことになりました。活発な議論ができる誌面にしたいと思います。どうぞよろしく。（上田）

原稿送り先は，〒171 東京都豊島区西池袋3丁目　立教大学・一般教育・生物　上田恵介

鳥学ニュース　No. 40

1991年7月31日　発行　（会員配布）

発行所　日本鳥学会　（〒160）東京都新宿区百人町3－23－1
国立科学博物館分館内　（振替）東京　1－6599
（電話）03（364）2311

発行人　中村　司　編集者　上田恵介・中村一恵　印刷所　添田印刷